

フランスで学んで

坂井 利佐子

(大学院文学研究科文化財学専攻 平成14年度修了)

私が別府大学を学び舎としたのは社会人になってからのことである。別府大学の科目等履修生に登録して学芸員資格を取った後、同大学院文化財学専攻に入学した。かつて大学でフランス文学を専攻して以来フランスに興味があったので、同国の美術について学びたいと思った。その一方で、改めて日本の美術・文化財の素晴らしさを知ったことも大学院での大きな収穫であった。

とは言え、修士論文のテーマは19世紀フランス美術史を主軸にしていたので、フランスから遠く離れたこの地で資料や情報の収集にもどかしさを感じないわけではなかった。そうした矢先、本学がフランス南部のモンペリエ第三大学（別名ポール・ヴァレリー大学）と交換留学生の協定を結び、私は留学生として学び舎を彼の地に移し、幸運にも本場で学ぶ機会を得ることができたのだ。

フランスの教育システムは日本と大きく違う。大学のほとんどが国立で、個別の入試はないが、バカロレア（大学入学資格試験）に合格しなければならない。大学2年目で「大学一般課程」、3年目で「リサンス」、4年目で「メトリーズ」の修了証書が各々取得できる。さらに博士課程に進むためには、5年目に再度論文を提出して、「DEA（博士論文提出資格証）」を取得しなければならないが、フランスの大学では今後、メトリーズとDEAを統合したMASTER制を設置するというのだ。

学生はメトリーズで最初の研究論文を書く。私はその美術史科に登録した。論文に重点を置いている課程なので大学での講義は少なく、空いた時間を各々の研究にあてる。前期試験は1月、後期は5月にあり、論文は6月もしくは9月に提出する。

私は寮生活をしてしたが、学生達はよく学びよく遊ぶ。試験の前日でも、「日中は勉強に費やしたから、今夜は映画を観に行く」と言って出かけ、翌日しっかり合格点を取る。気分転換の術を心得ている。フランス人は常に前向きに考えるというのが私の印象だ。行き詰まりを感じた時に支えられたのも彼らの言葉であった。「完璧よりも最善を尽くすこと。くよくよしない。人は人、自分は自分なのだから。」

資料収集は手探りの反面、楽しい作業でもあった。モンペリエの大学図書館も市立図書館も蔵書はかなり充実していたが、何度かパリにも足を運んだ。指導教授の紹介状を手に訪れたオルセー美術館の資料室では、国家・彫刻家名のアルファベット順に棚にきちんと整理された莫大な資料に囲まれ、自分の主題に関係なくとも片っ端から見てみたい好奇心にかられた。また、いくつかの美術館には文書で資料の問い合わせをしたが、心待ちにした返事に時に励ましの言葉が添えられていることもあり、勇気づけられた。

基礎資料の収集には、フランス文化省による「BASE JOCONDE」という国内の主な美術博物館所蔵作品を検索するインターネットサイトも役に立った。文献に関しては、「SUDOC」という国内の大学を始めとする研究施設の図書館を網羅した検索機能があり、所蔵先が瞬時に分かり、在籍する大学を通して他大学等に有料で貸出しやコピーを依頼することもできる。

考古・美術史学専攻の国内の大学生にはまた特筆すべき魅力的な特権がある。学生証を提示すれば、国立の美術博物館を無料で見学できるのだ。当然ルーヴルやオルセー美術館もフリーパスである。（ちなみに毎月第一日曜日には、国公立の美術博物館は入場無料になる）。

フランスの大学では大勢の留学生を受け入れているが、フランス語とフランス文化を学んだ外国人たちが母国に戻ってその普及に貢献してくれるというのが狙いのひとつにあると聞いている。自国の文化・芸術に誇りをもち、その保護と発展に国をあげて取り組むフランス。フランスで美術作品を研究しながら、私は改めて母国日本の素晴らしい芸術文化を意識し、誇りに思った。

モンペリエの古本屋で高山辰雄氏のフランス語版の画集を見つけた時は、その偶然の出会いが嬉しくて、レジで「同郷の画家です」と言ったら値引きしてくれた。日本とフランスの素晴らしい芸術文化に触れ、今私は両者の発展・普及のためにささやかでも自分にできることを模索している。